言語と文化の関係性にむけて：日英語の機能類型論的考察

Concerning the Relationship between Language and Culture:
A Functional-Typological Account of English and Japanese

江連　和章
EZURE　Kazuaki

1．はじめに：言語と文化・社会

人間のコミュニケーションにおける主要な手段は言語であるが、[1] コミュニケーション・モデルにおいて言語が厳密にどのような役割を果たし用いられるかについての詳細は、言語そのものを研究対象とする言語学の領域でも解明されていない点が多い。まして、異なる文化的背景を持つ者どうしのコミュニケーションでは、多くの場合それぞれの母語も異なるなど多種多様な変異が含まれるため、言語コミュニケーション（verbal communication）のあり方については、より一層多くの要因に配慮した一般モデル理論が求められる。

本稿は、異文化間の言語コミュニケーションを扱う研究プログラムの一環として、言語と文化・社会の関係を探るための個別研究である。主な目的は、現在日本の異文化コミュニケーションの場で主として使用される日本語と英語を対象として、それぞれの言語の「発想」とでも呼べる一般的特徴を比較分析の手法により機能類型的に検証・考察することにある。

伝統的に「言語と文化は密接につながり合う」という見方は繰り返し論じられてきており、一般的にはそれは当然のことのように受け入れられている。しかし、そのような「言語と文化のつながり」を客観的かつ明示的に実証することは容易ではなく、その確かさについては更なる検証が求められているのが関連研究領域における実情である。[2] 特に異文化コミュニケーションの点からみると、言語と文化の関連性はとりわけ重要な検討課題となる。と言うのも、仮に「言語と文化のつながり」が確かなものだとすると、それはいわゆる「サピア・ウォーフの仮説」として知られる言語相対性（linguistic relativity）の仮説（cf. Whorf 1956）と連動した場合、コミュニケーションに用いる共通言語そのものが当該コミュニケーションに影響を与えうることになるという、単純ながらも無視できない重要な帰結をもたらすことになるからである。そして、これは、例えば今日世界共通語としての役割が期待されている英語に照らして考えると、（多くの識者が既に主張している）「特定の英語文化圏とは切り離された共通語としての英語を提唱し用いる」ということは、[3] 具体的にはどのようなことなのか、また、それはどのようにして可能なのか、という実質的問題に対して、それを客観的に論じるための一つの有効な材料を提示することになる。本研究は、このような理論的研究背景に基づく。

2．言語の発想

言語を介した異文化コミュニケーションに関与する一般的要因は何か。その中でも、実際にコミュニケーションをおこなう当事者の知識や経験にかかわるものに限定した場合、吉田（1995）が指摘する三つ

の要因が参考になる。その三つとは、人類に共通した普遍的価値観、生まれ育った社会や文化に共通する価値観、個人的体験である。[4] これらについての詳細は割愛するが、本稿が問題とするのは、二つめの社会や文化に共通する価値観と言語そのものについての知識との間の関係である。これは、より簡潔に「言語と（社会も含めた）文化の関係」と言い換えても差し支えないだろう。吉田（1995）はこれら二つの関係については特に触れていないが、仮に、言語と文化は密接に関連するということであれば、当然これら二つの内容は独立したものではなく、互いに、あるいは、一方から他方へ影響を与えることになる。本稿ではこの可能性を探るべく、まずは客観的分析が十分可能な言語について、日本語と英語の比較考察をおこなう。

日英語に限るものではないが、ある言語をその構造に照らして特徴づける場合、音声に関する特徴（音声学、音韻論）、（狭義の）文法に関する特徴（形態論、統語論）、意味と表現・使用法に関する特徴（意味論・語用論）の大きく三つに分けられるのが一般的である。その中でも、言語と文化・社会との関係を考察する場合、文化・社会と直接つながりを持つ可能性が高いのは意味や表現・使用法であり、間接的ながらも関係性を持つ可能性が十分あるのが文法である。なお、意味と表現・使用法については、語彙や語法のような小さな単位から、談話構造のような大きな単位まで様々な言語単位が含まれる。従って、次節では、日本語と英語の文法規則、語彙と語法、構文、表現・使用法、談話構造という大小様々な項目や単位の言語現象にわたって「日英語の発想」という視点から比較考察をおこなう。

ここで、本稿における重要概念である「発想（法）（idea）」という用語を導入しておく。発想（法）という表現は「言語の発想（法）」という述べ方などで頻繁に用いられるが、その意味するところは不明瞭である場合が多い。本稿では、これを（十分とは言えないまでも）ある程度明示的に定義づけられた一つの理論的概念として扱う。「発想（法）」とは、ある個別言語について、外界の状況を表現するための文法、意味、表現・使用法等にみられる特徴が、特定少数の語彙項目や文法項目だけに適用するのではなく、かなりの一般性を持って異なる領域に共通して幅広く適用する「傾向」として捉えられる場合、その一般的傾向を示して「発想（法）」と呼ぶことにする。[5]

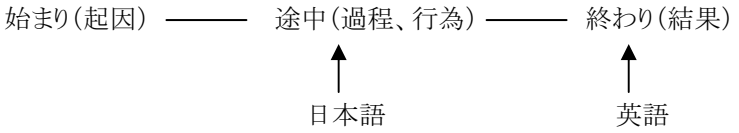
これまでの日英語比較研究では、上述した意味での日英語の発想法として様々な特徴づけがなされてきた。例えば、事実志向の英語と立場志向の日本語（cf. 水谷 1985）、 結果志向の英語と過程志向の日本語（cf. 池上 1980-1981、1981）、境界志向の英語と中間志向の日本語（cf. 影山 2002）、 人間志向の英語と状況・自然志向の日本語（cf. 國廣 1975、池上 1981）などがある。これらはそれぞれ日英語のある側面を照らし出しており、検証に値するものである。本稿では、その中でも、結果志向と過程志向、そして、（後述するように）それを内包するより一般性の高い境界志向と中間志向という発想法に焦点を当てる。

3. 英語の結果・境界志向性と日本語の過程・中間志向性

「英語は結果志向性が強く、日本語は過程志向性が強い」とする日英語観は、池上（1980-1981、1981）以来数多くの研究で扱われてきた。その一つである影山（2002）は、これを概略（1）のように図示している。影山（2002）におけるこの図の正確な位置づけは定かではないが、本稿では、（1）を単なる説

明の便宜上のものではなく、日英語それぞれの母語話者が言語知識として有する概念スキーマ（conceptual schema）の簡略化した表示として仮定する。[6]

(1) 事象の展開における日英語間の志向性の違い[7]



cf. 影山（2002: 13）

意味論において、過程（process）や結果（result）という概念は、述べるまでもなく、広義の出来事すなわち事象（event）についてのものであり、その内部構造の一部として捉えられるものである。(1)の概念スキーマは、全体として事象の展開を示し、起因、過程・行為、結果の三つの下位事象（subevent）で構成されている。ここまでは、個別言語の種類にかかわらず人間が普遍的（universal）な言語知識として持つスキーマであるが、日英語の志向性の相違は、この概念スキーマの内部構造において、（矢印で指し示されているように）日本語の場合は過程・行為に焦点（focus、prominence）が当てられるのに対し、英語の場合は結果に焦点が当てられるという違いにより記述される。

更に、影山（2002）は（1）よりも一般的な表示として概略（2）を提示し、実質、日英語の発想の相違として「英語は境界志向性が強く、日本語は中間志向性が強い」という趣旨の主張を展開する。（（2）についても、（1）と同様、ここでは概念スキーマとして扱う。）

(2) 日英語間の志向性の違い[8]

cf. 影山（2002: 15）

（1）と（2）の相違は、（1）では「起点から過程へ、過程から結果へ」という流れとして組み込まれている方向性（directionality）が、（2）では捨象されている点である。そのため、（2）は事象だけに限らず、方向性のないモノ（thing）をはじめあらゆる概念範疇（conceptual category）に適用する、より一般的なスキーマになる。この概念スキーマ（2）では、英語の場合は両端の境界（boundary）に焦点が当てられるのに対し、日本語の場合は中間（middle）に焦点が当てられており、これにより、境界志向の英語と中間志向の日本語という発想法の対立が示される。なお、この＜中間－境界＞志向の対立を示す概念スキーマ（2）は、記述力の点で、＜過程－結果＞志向の対立を示す概念スキーマ（1）を内包する、より一般的なスキーマであることを確認されたい。

次節以降では、（1）と（2）の概念スキーマに基づく「結果志向の英語と過程志向の日本語」、更には、より一般的な「境界志向の英語と中間志向の日本語」という日英語の発想法の視点から、一見無関係と

思われる、文法規則、語彙と語法、構文、表現・使用法、談話構造の領域にみられる日英語の相違に対し、大筋ながらも一貫した記述説明が可能であることを示し、これら発想法の実在を経験的に支持し裏づけることを試みる。

3．1．文法

日英語における＜中間－境界＞志向性の対立が両言語の文法に反映していると捉えられる現象として、ここでは基本的なものを一点指摘しておく。それは、名詞の区別についての両言語の相違である。

英語では、可算名詞と不可算名詞の区別、更に可算名詞については単数と複数の区別を文法上の基本的な対立とし、具体的には、それらの対立に基づいて不定冠詞の有無、単数と複数の語形上の区別、動詞との数の一致、例えば *this* と *these* のようないくつかの決定詞との共起関係などが規定される（cf. 池上 1982）。このような名詞の区別は、概念スキーマ（2）がモノという概念範疇に適用した際の境界、別の言い方をすれば、モノの輪郭を意識していることの反映と捉えられる。すなわち、可算名詞と不可算名詞の区別については、名詞の表すモノの輪郭が明瞭であるか不明瞭であるかという概念上の区別であり、単数と複数の区別については、明瞭である輪郭が全体として単数か複数かという概念上の区別になる。いずれにしても重要なのは、これらの区別は全て輪郭という境界を強く意識する、境界志向型の文法的区別であるという点である。

一方、日本語では、可算名詞と不可算名詞の区別や単数と複数の区別は文法上のそれとしては存在しない。これは、モノの輪郭、つまり、概念スキーマ（2）の二つの境界に対して日本語は無関心であり、むしろ中間に焦点が当てられている中間志向型の言語であることの消極的な反映として捉えられる。

なお、補足となるが、ここで問題とするモノの輪郭・境界とは、特に視覚的または物理空間的な境界に限ったものではなく、心理的空間における境界など抽象的なものも含まれることに注意されたい。これに関して、久野・高見（2004）が興味深い事例（3）を提示している。

(3) a. Our family had *a roast chicken* last night.
　　b. Our family had *roast chicken* last night.　　久野・高見（2004: 4）

状況としては前夜に家族で丸一羽のローストチキンを丸焼きにして食べた場合の発話であるが、その場合（3a）と（3b）のどちらが適切か。この場合、ローストチキンが丸一羽の形状のまま食卓に上がるため、視覚的にはその輪郭が明瞭であるにもかかわらず、多くの話し手は、不定冠詞がつかない不可算名詞としての *roast chicken* が目的語である（3b）を選ぶ。久野・高見は、「家族が食べたのが、1匹のチキン全体ではなく、食べ物として焼かれた肉の部分であり、1つの明確な形をもつものとしては意識されていないため」（pp.4-5）と説明する。食べる対象としてみる心理的空間ではローストチキンの輪郭は不明瞭であるために、不可算名詞が用いられると言えよう。

3．2．語彙の意味と用法

本節では、語彙のレベルで日英語の＜中間－境界（過程－結果）＞志向性の対立がみられる現象二点について考察する。

まずは、動詞の意味に関して、本来その語彙的意味に含まれる「行為の結果の達成」が文の意味解釈上無効化（cancel）できるか否かについての日英語間の相違がある（cf. 池上 1980-1981、Tsujimura 2003）。

(4) a. *I boiled the water, but it *didn't boil*.
b. （容器の水を）沸かしたけれど、*沸かなかった*。 （池上 1980-1981: 526）
(5) a. *I burned the garbage, but it *didn't burn*.
b. そのゴミを燃やしたけれど、*燃えなかった*。
(6) a. *I opened the window, but it *didn't open (because it was rusty)*.
b. 窓を開けたけど、*(錆びついていて)開かなかった*。 （cf. Tsujimura 2003: 393）

(4)-(6)の日英語文において、それぞれ行為の結果の達成を無効にする文脈を後続させた場合、英語の場合はそのような無効化を許さず、文全体として容認不可能になるのに対し、日本語の場合は無効化が許容され、文全体が容認可能になる。このような日英語間の相違は、池上（1980-1981）が指摘するように、単に特定少数の日英語の動詞対のみに限られたものではなく、両言語の多くの動詞に一貫してみられる、いわば傾向とでも呼べる全体的特徴である。（7）に、同様の振る舞いを示す他の動詞対を例示する。

(7) call-電話（を）する、close-閉める、defrost-解凍する、dry-乾かす、divide-割る、grow-栽培する、knit-編む、loosen-緩める、melt-溶かす、memorize-暗記する、persuade-説得する、raise-飼育する、read-読む、repair-修理する、solve-解く、wake-起こす、warm-温める
cf. 池上（1980-1981）、江連（2007）

このような結果達成の無効化についての日英語動詞の一貫した相違は、概念スキーマ（1）が示すように、結果志向性の強い英語と、過程志向性の強い、すなわち結果志向性については弱い日本語、という対立的発想が顕現したものとして説明される。

もう一つの語彙関連の現象として、行為を修飾する副詞との共起性についての日英語動詞間の相違がある（cf. 影山 1996、早津 1995）。英語副詞 *hard* や日本語副詞「一生懸命」は、（概念スキーマ（1）における結果と対立する意味での）行為すなわち過程を修飾する副詞であるが、（8）と（9）にみられるように、これらの副詞と日本語動詞は共起するが英語動詞は共起しないという事例が多くの動詞対について観察される。（10）にそのような動詞対の例を示す。

(8) a. *The boy made a model plane *hard*.
b. 子供は*一生懸命に*プラモデルの飛行機を作った。 （影山 2002: 12）

(9) a. *I burned the garbage *hard*.
b. (私は) *一生懸命*ゴミを燃やした。

(10) boil-沸かす、break-壊す、close-閉める、climb-のぼる、cook-料理する、count-数える、defrost-解凍する、divide-割る、eat-食べる、kill-殺す、learn-学習する、melt-溶かす、memorize-暗記する、play-演奏する、read-読む、wake-起こす、walk-歩く

cf. 江連(2007)

このような行為・過程を修飾する副詞との相性についても、過程志向性の強い日本語動詞は無理なく共起するが、過程よりもむしろ結果に焦点を当てる英語動詞は共起しにくいと説明できる。

その他、日英語の<中間－境界(過程－結果)>志向性の対立から説明できる語彙関連の現象としては、移動を表す動詞の目的語の選択や解釈について日英語間でみられる相違、心理動詞に関して経験者を目的語とする使役他動詞が英語には多く日本語には少ないという傾向、更に、名詞については、動詞派生名詞が事象名詞だけではなく具象名詞としても機能する英語と、具象名詞としては機能しにくい日本語、などがあげられる(cf. 影山 1996、2002 他)。これらについての扱いは割愛するが、いずれについても、概念スキーマ(1)と(2)で示される日英語の発想法の対立により自然な説明を与えることができる。

3. 3. 構文

本節では、構文(construction)レベルの現象を二点考察する。[9] まず最初に、(11)のような結果構文(resultative construction)をみる。

(11) a. I painted the wall *white*.
b. その壁を*白く* [*白に*] 塗った。

一般によく知られるように、英語はこの構文について極めて生産性が高い(cf. Levin and Rappaport Hovav 1995、Goldberg 1995)。一方、日本語はかなり限られた範囲でしかこの構文を容認しない(cf. 影山 1996 他)。(12)-(14)に例を示す。

(12) a. She pushed the door *open*.
b. *彼女は扉を*開けた状態*に押した。

(13) a. The hunter shot the bear *dead*.
b. *猟師はその熊を*死んだ状態に*撃った。

(14) a. He talked *himself hoarse*.
b. *彼は*喉をカラカラに*話した。

cf. 影山(1996)

このような結果構文の生産性についての日英語間の相違が、両言語の志向性の対立から説明できることは容易に理解できる。結果構文とは、記述レベルで略述すれば、文字通り行為の結果（概念スキーマ（1）における右境界の結果部位）を付け足す構文である。つまり、結果志向型の構文といえよう。そのような構文と結果志向性の強い英語との相性が良いのは当然であり、行為結果を付け足すことに対して英語は寛大であると言える。一方、中間志向性の強い日本語は、行為の結果の付け足しについては比較的厳しい制限を課すと考えられる。

次に（15）-（18）に例示するような移動を表す構文を考察する（cf. Jackendoff 1990 他）。この構文は、*walk*, *run*, *swim* ように移動の様態（manner of motion）を表す動詞と移動の着点（goal）や起点（source）を表す句が組み合わさることにより、（歩く、走る、泳ぐなど）ある特定の行為をしながら、起点から、あるいは、着点へ移動することを意味する。

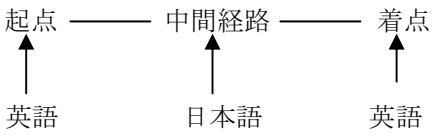
（15）　The man walked *to the station*.
（16）　The child ran *out of the house*.
（17）　The boys swam *to the island.*
（18）　Willy wiggled/danced/spun/bounced/jumped *into Harriet's arms*.　（Jackendoff 1990: 223）

この構文についても日英語間に相違がある。英語は、結果構文と同じく、この構文についても生産性が非常に高い。一方、日本語はこの構文を容認しない（cf. 影山 1996）。（15）-（18）に対応する日本語文（19）-（22）は、程度の差こそあれ、容認度は低くなる。

（19）　?男は*駅に*歩いた。
（20）　?その子どもは*部屋から*走った。
（21）　??少年たちは*島に*泳いだ。
（22）　*花子は*太郎の腕の中に*小刻みに動いた/踊った/くるくる回った/飛び跳ねた/跳んだ。

以上のような移動を表す構文についての日英語の相違は、（1）の＜過程－結果＞志向の対立ではなく、より一般性の高い（2）の＜中間－境界＞志向の対立により説明される。ここで、一般性の高い概念スキーマ（2）をこの構文が表す移動の概念領域に適用させて、（23）として表示する。

(23)　移動の概念スキーマの日英語の相違



移動を表す構文とは、略述すると、動詞の意味に、（23）のスキーマの左境界に位置する起点か、右境界に位置する着点を付け足す構文である。すなわち、左か右かは別としても、境界志向型の構文と言え

よう。そうであれば、自ずと境界志向型の英語とは相性が良く、中間志向型の日本語とは相性が悪い、という帰結が引き出される。

その他、ここでは言及するにとどめるが、移動関連では使役移動を表す構文（caused motion construction）や *One's Way* 構文（cf. Jackendoff 1990、Goldberg 1995、影山 1996、2002）、更には、場所格交替（locative alternation）や二重目的語構文などの日英語における違いについても、基本的には本節で扱った二つの構文と同様に、両言語の＜中間－境界（過程－結果）＞志向性の対立から自然な記述説明を与えることができる。

3．4．表現・使用法と談話構造

これまでは、日英語の表現の良し悪し、すなわち「文法的に正しい表現」を規定する際にそれぞれの言語の志向性が大きく作用する場合を扱った。本節では、文法的に正しい表現の中でどの表現が実際に用いられやすい「自然な表現」か、という表現法あるいは使用法においても、日英語の＜中間－境界（過程－結果）＞志向性の対立が深く関与する可能性について考察する。それにあたいする現象は複数あるが、ここでは、その中でも単純明瞭に両言語の志向性が顕現しているとわかる事例を、文のレベルと談話のレベルから一点ずつ取り上げることにする。

日英語の表現・使用法を比較して特徴づける際よく指摘されることとして、大雑把かつ直感的な述べ方ではあるが、「英語では物事をはっきり表現するのに対し、日本語では物事をぼかして表現する」という類のものがある。これをもう少し明示的に表現すれば、「英語では意味の輪郭を明瞭にして表現する傾向があり、日本語では意味の輪郭をぼかして表現する傾向がある」といえよう。この点について池上（1982）が興味深い考察をおこなっている。池上は、「（英語に対して日本語では）外延的にも内包的にも意味の輪郭をぼかすような形で表現しようとする傾向は、日本人の言語使用の際の志向性として広くみられる」（p. 78）と指摘し、おおよそ（24）-（26）のような例を提示している。

（24） 外延的にモノの意味の輪郭をぼかした表現

a. 五十円切手を*2つほど*ください。

b. *このあたり*で止めにしよう。

（25） 内包的にモノの意味の輪郭をぼかした表現

a. *お茶でも*飲みませんか？

b. *そんなこと*言っちゃ駄目。（英文 *You can't say that* の翻訳）

（26） 命題の意味の輪郭をぼかした表現

a. *ちょっと*お使いに行ってくる。

b. *ぼつぼつ*出かけるか。

cf. 池上（1982: 78-80）

このような「ぼかし表現」は、池上の例に限らず、日本語には数多くあり、また実際にも使用されている。一方、英語では、日本語と比較した場合、同類の表現はその数にしても使用にしてもかなり少なく、意

味の輪郭を明瞭にして表現するのが普通であると言えよう。このような日英語における表現・使用法の違いも、(前述したように)意味の輪郭という概念が(2)のスキーマの境界に対応するとすれば、境界を重視する英語と中間を重視する日本語という対立から自ずと生じるものである。

最後に、談話レベルの現象として多々良(2007)の研究をあげる。多々良は、サッカーの第 18 回ワールドカップに関する日本語新聞と英語新聞の記事の内容について比較分析をおこない、いくつかの興味深い分析結果を提示している。中でも特に本稿と関係することとして、見出し(headline)の内容についての日英語新聞における特徴の違いを指摘している。多々良によれば、英語新聞の見出しは、 試合結果とその結果を生み出した直接的原因との論理的関係を明記する傾向がある。一方、日本語新聞の見出しは、試合の中で起きたことに対して言及する傾向がある。これら見出しの内容についての異なる傾向は、敢えて強調するまでもなく、英語新聞の見出し内容は結果志向的であり、日本語新聞のそれは過程志向的なものであることを強く示唆している。新聞記事という談話レベルの構造においても、日本語と英語の対立する志向性が顕現すると分析できる。

以上、本節では、日本語の中間・過程志向性と英語の境界・結果志向性という発想法の実在を支持する経験的議論として、これら対立する志向性により、文法規則、語彙と語法、構文、表現・使用法、談話構造という広い様々な領域でみられる両言語の相違に対し、大筋ながらも一貫した記述説明が可能であることを示した。

4. 日英語発想法の理論化をめぐる問題

前節では、＜中間－境界(過程－結果)＞志向性に関する日英語の対立する発想法の実在について経験的な裏付けをおこなった。これらの発想法が実在するとなると、当然それらは少なくとも日英語の個別文法、そして、おそらくは一般文法理論において取り扱われなければならない。それでは、(簡略化した表示ながらも)(1)と(2)の概念スキーマとして提示される日英語の発想法は、文法の中でどのように位置づけられ理論化されうるのであろうか。研究史を顧みても明らかなように、この言語の発想法を理論化するという問題は決して容易ではなく、その詳細についての議論は改めて別の機会を設けて慎重にすすめる必要がある。本稿では、この＜中間－境界(過程－結果)＞志向性の理論化にむけて、特に文法理論のあり方に深く関与する点に焦点を当てて論じる。

言語の発想法を理論化する際に問題となることの一つに、言語のモジュール性(modularity)との関係がある。2節で述べたように、発想法とは言語の異なる領域を横断して適用するものである。一方、例えば従来の生成言語学(generative linguistics)のように、モジュール性を仮定する言語理論では、統語論や意味論のような言語内部の個々の領域どうしの関係や、更には、言語全体とそれ以外の認知領域との関係について、それぞれの領域が一つの独立したモジュールとして機能することを重要視する。すなわち、モジュール的言語観においては、単純素朴に考えた場合、それら個々のモジュール領域を横断するかたちで作用する発想法を取り込むことは理論上困難であるといえる。このことは同様に、言語能力(linguistic competence)と言語運用(linguistic performance)の区別(cf. Chomsky 1965)についてもいえる。周知の通りこの区別については賛否両論があるが、[10] この二つを明瞭に区別する側に立てば、仮にある言語の発想法がこれらの両方に影響する場合、それを捉えるには言語能力と言語運用にまた

がる更なる別の理論が必要になる。[11] 現在において、様々な立場はあるものの、言語のモジュール性や言語の能力と運用の区別は有力な仮説であることを踏まえると、言語の発想法を厳密に理論化する際には、これらの問題を直視する必要がある。

具体的に、＜中間－境界（過程－結果）＞志向性に関する日英語の発想法の理論化について考えてみよう。これらの志向性は、3節でみたように、両言語の文法規則、語彙と語法、構文、表現・使用法、談話構造と、言語のあらゆる領域に適用するものである。これらを、ごく大雑把にではあるが、言語の能力と運用の区別や、言語のモジュール別に振り分けると概略以下のようになる。文法規則、語彙と語法、構文については主として言語能力にかかわるもので、モジュール別には、文法規則は統語論または形態論、語彙と語法はレキシコン、構文は統語論と意味論の両方に属する。一方、表現・使用法と談話構造については、言語能力のみならず言語運用も多分に関与する領域であるといえよう。このような広範な領域にたいして、どのように概念スキーマ(1)と(2)を適用させていくのか。筆者が知る限り、この日英語の発想法を扱った研究で、上述した問題意識を持って厳密かつ体系的にそれを論じたものはない。今後、これら日英語の発想法の理論化に向けては、言語のモジュール性や能力と運用の区別を認めつつも、それら全体を対象領域とする上位理論の存在を仮定し構築する必要があると考える。

5. 結語

本稿では、言語と文化の関係の究明に向けて、日本語と英語の発想法について機能類型的な比較考察をおこなった。「過程・中間志向性の強い日本語」と「結果・境界志向性の強い英語」という日英語それぞれの発想法を支持する経験的議論を展開し、また、それらを理論化する際の問題点を論じることにより、今後具体的な分析と提案にすすむための基盤を提示したことになる。

他方、本来の眼目である言語と文化との関係については、実証的調査研究という意味では、これから着手する課題となる。本稿で論じた日英語の発想法は、（英語圏の文化・社会と日本のそれとの比較でよく論じられる）結果主義対過程主義や個人主義対全体主義という文化的価値観の対立との間に、無視できない程の直接的な強い相関性があるかのように思われる。しかしながら、冒頭でも述べたように、言語と文化の関係を客観的に検証することは容易ではなく、ここではあくまでも単なる推察にとどめておく。

参考文献

Chomsky, Noam *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, 1965.

Chomsky, Noam *The Minimalist Program*, MIT Press, 1995.

江連和章 「日英語の事象無効化現象」 *Papers from the Twenty-Fourth Conference of The English Linguistic Society of Japan*、2007.

Goldberg, Adele E. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, 1995.

早津恵美子 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて－意味的な特徴を中心に－」 須賀一好・早津恵美子（編）『動詞の自他』 ひつじ書房、1995.

本名信行 『世界の英語を歩く』 集英社、2003.

池上嘉彦 「'Activity'- 'Accomplishment'-'Achievement': 動詞意味構造の類型(1)-(4)」『英語青年』 研究社、1980 年 12 月号-1981 年 3 月号.

池上嘉彦 『「する」と「なる」の言語学』 大修館、1981.

池上嘉彦 「表現構造の比較－<スル>的な言語と<ナル>的な言語－」 國廣哲弥(編)『日英語比較講座4 発想と表現』 大修館、1982.

Jackendoff, Ray *Semantic Structures*, MIT Press, 1990.

影山太郎 『動詞意味論』 くろしお出版、1996.

影山太郎 『ケジメのない日本語』 岩波書店、2002.

國廣哲弥 「人間中心と状況中心－日英語表現構造の比較－」『英語青年』 研究社、1975 年 2 月号.

久野暲・高見健一 『謎解きの英文法: 名詞と冠詞』 くろしお出版、2004.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav *Unaccusativity,* MIT Press, 1995.

水谷信子 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版、1985.

多々良直弘 「結果事態はどのように伝えられるのか－新聞報道に見る日本語と英語の好まれる言い廻し－」(口頭発表) 日本英語学会第 25 回大会ワークショップ「英語と日本語の＜結果志向＞＜過程志向＞を再考する」、2007.

Tsujimura, Natsuko, "Event Cancellation and Telicity" *Japanese Korean Linguistics* vol. 12, 2003.

山田雄一郎 『言語政策としての英語教育』 渓水社、2003.

安井泉 『ことばから文化へ－文化がことばの中で息を潜めている』 開拓社、2010.

吉田研作 『外国人とわかりあう英語－異文化の壁をこえて』 筑摩書房、1995.

Whorf, Benjamin L. *Language, Thought, and Reality*, MIT Press, 1956.

---

[1] このことは、言語はコミュニケーションのための道具であるという主張と同値ではない。

[2] 言語と文化の関係を探る学際的な研究状況については、例えば、安井(2010)を参照。

[3] 例えば、本名(2003)、山田(2003)を参照。

[4] 正確には、吉田(1995: 48-49)は、これら三つの要因を人間の言動を方向づける要因として指摘している。

[5] 従って、言語の発想は、それだけでは必ずしも当該言語圏の文化・社会との密接なつながりを示すものではないことに注意されたい。

[6] 正式かつ詳細な概念スキーマの表示とその説明は、本稿の趣旨からすると必ずしも必要ないため、紙幅の関係上割愛する。

[7] (1)の表現及び表示は、影山(2002: 13)のそれと同一ではなく、本稿の内容に合わせたものである。後続する(2)についても同様である。

[8] 注7を参照。

[9] 動詞が関与する現象の中には、理論的枠組みに応じて、それを動詞の語彙的現象とみなすか、または、構文として分析するのか意見が分かれるものがある。本稿では、特に特定の理論に依拠するものではないため、語彙現象と構文の区別についての厳密な線引きはしないことにする。

[10] 例えば、巨視的に見た場合、生成言語学と認知言語学(cognitive linguistics)の文法観の対立がある。

[11] 本稿で述べる、言語の発想法が複数の領域を横断して適用するということは、極小主義プログラム（the Minimalist Program, cf. Chomsky 1995）や認知言語学が取り組む、言語の性質を他の認知能力や生物学さらには物理学の性質に還元する試みとは別物であることに留意されたい。